

Yakugyo Jihō

医薬産業ビジネスマガジン

薬業時報

2011 6/25 NO.54

特集

製薬企業・卸 2010年度決算 徹底分析



くすりの
現場から



File No.57

すずらん薬局 大手町店

(広島市)

制度化待たず

「在宅拠点薬局」を 乳幼児から高齢者まで幅広く展開

近年、在宅医療に取り組み薬局が増えているが、無菌調剤室を設置して輸液調製を行ったり、終末期緩和ケアや乳幼児在宅までフォローアップしていたりする薬局はまだ少ない。労力とコストに見合う調剤報酬体系が整備されておらず、薬局経営の観点から大きなリスクを背負うことになるからだ。

広島県を地盤に、すずらん薬局を運営するホロンの古屋憲次社長は、「手間のかかる手技に対する評価がない、在宅医療で使用できる医薬品が少ない、薬剤や医療材料の在庫負担への配慮が足りないなど、制度上の不備はいくらでもある。(在宅の取り組みを)やればやるほど逆ざやで赤字になるケースも珍しくない。早急な改善が必要だ」と語気を強める。しかし、何もしなければ医療提

供施設としての薬局の存在価値が問われる。医療現場での実績がなければ調剤報酬の評価も上がらない。すずらん薬局大手町店では、さまざまなリスクを覚悟の上で、乳幼児から高齢者まで、幅広い患者の輸液調製、在宅訪問活動を行っている。

受け皿がないから やるしかない

中でも興味深いのは乳幼児在宅だ。同店では、ヒルシユスプルング病、短腸症候群といった腸管機能不全の乳幼児患者をメインにフォローアップしてきた。

この疾患は経口で十分な栄養の吸収ができないため、高カロリー輸液(TPN製剤)が欠かせない。輸液調製に当たっては、成人



くすり・介護用品 処方せん受付
すずらん薬局 大手町店



①ホロンでは各店に順次 iPad を導入中。動画を使って薬局機能、疾患、薬の服用方法などを患者に分かりやすく説明する狙いだ②すずらん薬局大手町店の若宮さん③ホロンの古屋社長④無菌調剤室で輸液調製を行う様子⑤クリスマス時期に調製した乳児患者用の輸液バッグ。リボンを付けサンタの描かれた袋に入れて患者宅に届けた⑥シリンジポンプのレンタルも開始した



①



②



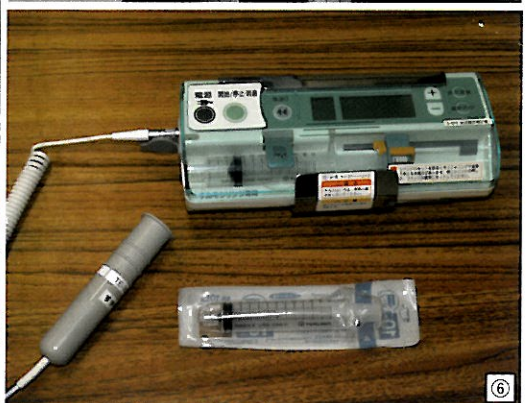
③



④



⑤



⑥

用のようにキット製剤がなく、乳児の症状・状態に合わせてさまざまな成分をカロリーコントロールしながら混注調製する。いわば「オーダーメイド製剤」(古屋社長)だ。その分、かかる労力も大きく、ある症例では、成人用の基本処方なら1週間分を約10分で調製できるところ、乳幼児用は2時間もかかったという。

こうした手技に対し、現行調剤報酬の「無菌製剤処理加算(中心静脈栄養法用輸液)」は、1日につき40点。適切な評価に基づく点数規定がなされているとは言い難い。

それでも、「われわれ(の薬局)が対応しないと、他に受け皿がない。受け皿がないと、病院から自宅に帰ることができなくなり、また入院しなければならなくなる患者も出てくる」(古屋社長)。使命感がスタッフを突き動かしているといえる。

同店の若宮香織さんは、「乳幼児在宅は家族、特にお母さんの負担が非常に大きい。高齢者なら介護保険があり、ヘルパーや訪問看護師がフォローしたりもできるが、乳幼児の場合はどうしても『親が看るもの』と考えられてしまう。

実際に、患者や家族の負担を軽減するための提案も行っている。広範囲ヒルシユスブルング病と機能的短腸症候群を抱え、人工肛門造設術を行った女兒のケースでは、輸液量の少ない輸液バッグとポンプをリュックに入れて背負えるようにすれば女兒の行動制限が最小限で済むと判断。輸液の分割などを処方医に提案し、実現させた。その結果、夕方の時間帯に輸液が軽くなり、患者、家族双方のQOLが格段に向上したという。

この他にも、注射薬を使用する末期がん患者の緩和ケアなど、難度の高い在宅医療に精力的に取り組む同店。患者の死に直面することも珍しくなく、在宅担当薬剤師が医療人として成長する機会になっている。

ただ、同店に勤務する薬剤師11人のうち、在宅訪問を担当する薬剤師はわずか3人。在宅担当者は症例報告をまとめ、他のスタッフはその報告書に目を通すことで、貴重な経験を薬局全体で共有できるように心掛けている。

薬局が入ることで少しでもその負担を減らしてあげたい」と話す。

症例を薬局内で共有